

養 護 ・ 訓 練

目 次

○ 指導計画作成の立場	577
○ 指導計画例	581

1 基本的な考え方

精神発達遅滞児は、単に知的な発達の遅れだけでなく、言語、感覚・知覚、運動、情緒・行動などにおける何らかの様々な発達上の障害を併せもっている。養護・訓練は、このような児童生徒の心身の障害の状態を改善し、又は克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、心身の調和的発達の基盤を培うことを目標にしている。

学習指導要領の総則に、「学校における養護・訓練に関する指導は、心身の障害に基づく種々の困難を克服させ、社会によりよく適応していく資質を養うため、学校の教育活動全体を通じて適切に行うものとする」とあるように、養護・訓練は教育課程の中に領域として位置付けられ、「教育活動全体」の中で「適切に」指導されるべきものである。また、「特に、養護・訓練の時間における指導は、各教科、道徳及び特別活動と密接な関連を保ち、個々の児童又は生徒の心身の障害の状態や発達段階に即して」行われるべきものでもある。本校においても、従来からこれらの考えを踏まえ、感覚運動の指導、日常生活の指導、生活単元学習、作業学習、教科別学習などの指導の形態の中で配慮的に個に応じた養護・訓練の指導を行い、その中でも個別に指導することにより、よりよい改善を期待できる児童生徒については、抽出をして「養護・訓練の時間における指導」を行うことで、「養護・訓練に関する指導」の充実を図ってきた。

現在の本校の児童生徒の個別の課題を、学習指導要領の養護・訓練の五つの柱の視点から探ってみると次のようなことが指摘できる。

- ・ 生活リズムを含む基本的生活習慣など、身体健康や運動・動作面に起因することが未確立な児童生徒が多い。（特に小学部など教育初期の段階）
- ・ 状況による行動及び言語活動の滞り、過度の感情の起伏（情緒不安定）、行動の固執性などの心理的適応に関する課題を持つ児童生徒が多い。
- ・ 受容・表出言語の量的不足、構音の障害、構文の未熟、エコラリアなどの音声言語面の質的つまずき、補助手段の未獲得などの意思の伝達に課題を持つ児童生徒が多い。

さらにこれらを本校の研究テーマである「かかわり合いの豊かさ」の視点から整理すると、次のようになる。

- ・ 健康面及び身体操作面で多くの配慮を必要とするケースがある。
- ・ 認知的に未発達で、状況の把握が的確になされないための行動の滞りと思われる状態像や自我の未成熟に起因するとと思われる行動の滞りがある。
- ・ 人とのかかわり合いにおける協約性の高い交信手段の未発達が、つまずきの一つの要因となっている場合が多い。

これらの課題は本校における養護・訓練の指導の在り方を明確に示唆するものである。すなわち、その一つは学校生活全体の流れの中における指導の重要性である。つまり、般化の苦手な児童生徒にとって、それぞれが抱えている課題は、直接的経験や自分を表現できるような体験が含まれる学校生活全体の計画の中でこそ克服することができる。そしてもう一つが、個別に時間を

確保して集中的に、計画的に指導することの重要性である。つまり、現実的な集団の中では不適応を起こす児童生徒でも、一人一人の欲求、興味・関心に応じ、成就感、満足感を体得させやすい1対1の関係の中で計画的に学習していくことで、かかわり合いの基盤、すなわち、認知的、身体的基盤などが高められ、改善や克服が期待できる課題があることである。

そこで、本校では学校生活全体の流れの中で指導することはもちろん、「養護・訓練の時間における指導」も行うことで、「養護・訓練に関する指導」を充実させていくことにする。

2 目 標

- 言語、感覚・知覚、運動、情緒・行動などの様々な障害を併せもつ精神発達遅滞児に対して個に応じた指導を行うことで、心身の障害の状態を改善、克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養う。

3 指導計画作成の手順と配慮事項

(1) 「養護・訓練に関する指導」

全校児童生徒一人一人の実態に基づいて指導課題を検討し、個別指導課題票<表1>を作成する。なお、指導課題については、状態像の変容に留意しながら、下記の手順に従って年度当初選定する。

- ① 養護・訓練の五つの柱の内容を考慮しながら、子供の状態像及び課題を明確にする。
- ② 年間を見通した長期的目標を設定する。
- ③ 重点指導内容を設定する。

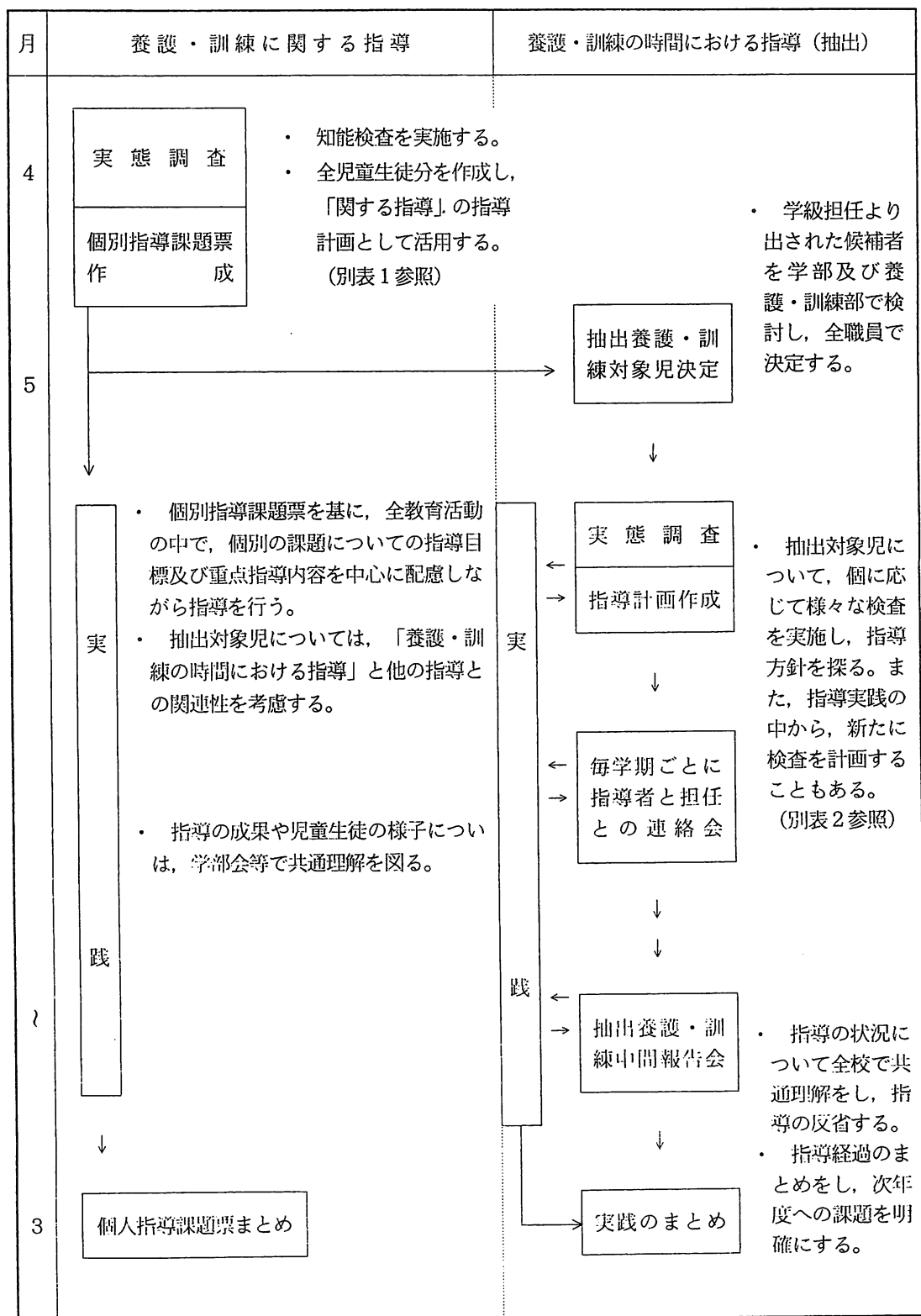
年度末に、指導の経過についてまとめ、次年度の指導課題及び重点指導内容などの参考になるようにし、指導の継続性が図れるようにする。

(2) 「養護・訓練の時間における指導」

「養護・訓練に関する指導」と併せて「養護・訓練の時間における指導」を行うことで、より一層の効果が期待できる児童生徒については、個別指導課題票<表1>より更に詳細な指導計画を下記の手順に従って作成する。

- ① 個々の児童生徒の障害に応じて、諸調査、検査などを実施することで、詳細な実態の把握がなされるようにする。
- ② 詳細な実態を前述(1)②の長期的目標と照らし合わせて、指導の仮説を立てる。
- ③ 仮説に基づいて、指導の方針を設定する。
- ④ 指導の具体化に当たり、短期的目標を設定する。
- ⑤ 養護・訓練の五つの柱の内容を考慮し、該当する内容を相互に関連付けながら、具体的な指導事項を設定する。指導事項の設定に当たっては、次の点に配慮する。
 - ・ 児童生徒の発達段階に応じた課題であること。
 - ・ 児童生徒が興味・関心を持って取り組むものであること。
 - ・ 課題達成を児童生徒自身が実感できるものであること。
 - ・ 児童生徒の発達の進んでいる側面も含むものであること。

【養護・訓練の指導手順】



4 指導計画活用上の留意点

- (1) 全児童生徒の「養護・訓練に関する指導」の指導課題については、養護・訓練の内容の五つの柱に基づき、「個別指導課題票」を作成する。

指導に当たっては、「日常生活の指導」「感覚運動の指導」「生活単元学習」「なかま」「作業学習」の領域・教科を合わせた指導の中で効果的に指導する。また、領域別・教科別の指導の過程の中で指導内容が児童生徒の課題と関連を持つものであれば、「養護・訓練に関する指導」を効果的に行う。ただし、その際、各教科、道徳、特別活動のそれぞれの目標達成を損なうことのないように留意する。

- (2) 「個別指導課題票」については、全教育活動の中で効果的に指導ができるように、全職員で共通理解を図る。

- (3) 指導目標については、児童生徒の実態の変容に応じて、弾力的に変更できるようにする。

- (4) 「養護・訓練の時間における指導」の指導計画については、「個別指導課題票」を基に学部内、養護・訓練部で検討し、抽出して指導を行った方が効果があると判断した児童生徒の実態把握を再度行ってから作成する。＜表②＞

- (5) 抽出して指導を行う児童生徒の指導計画は、指導を担当する養護・訓練部員が作成し、学級担任と連絡を図るとともに、必要に応じて家庭と連携をとりながら、効果的な指導が行われるように配慮する。

＜表 1＞「個別指導課題票」記入用紙形式

「養護・訓練に関する」個別指導課題						氏名 ()	
年学	課 題 項 目					指導目標(長期)	重点指導内容
度年	身体の健康	心理的適応	環境の認知	運動・動作	意思の伝達		
部 年 度 年							
	指導の経過						記入者()
部 年 度 年							
	指導の経過						記入者()
部 年 度 年							
	指導の経過						記入者()
部 年 度 年							
	指導の経過						記入者()
部 年 度 年							
	指導の経過						記入者()

<表2>抽出による養護・訓練の指導 指導計画例（重度精神発達遅滞）担当者 ○ ○ ○ ○

氏名：○ ○ ○ ○		学部：小学部		学年：2年		年齢：8歳		
IQ (MA)：測定困難				SQ (S:A)：15 (1:1)				
状 態 像 と 課 題	<p>生活リズムを含む基本的な生活習慣については、入学当初より、夜中に起き出し2時間程度遊んだり、泣いたりして過ごすことが2～3週間周期で続き、登校後の発熱や軟便などの体調不良が見られる。</p> <p>感覚面については、室内外を動き回っては、目についた物を何でも引っ張り出したり、かんだり、たたいたりして感触を楽しんでいる。特に、雑誌や毛布などの触覚への刺激、プラスチックやキーホルダーなどを落としたり、鳴らしたりすると高い音のする聴覚への刺激となる物を長時間もて遊ぶことを好む。最近では、自分の好きな雑誌や空き缶、キーホルダーなどを捜し出す様子が見られる。また、トランポリンによる揺れは好む様子を見せるが、手足を持って揺らされたり、抱っこされた状態で回転されたり、遊動木や回転盤（ローリングシーソー）などの揺れや回転を伴う遊具で遊んだりすることを極度に嫌がる。</p> <p>情緒面については、快、不快のどちらの状態においても、手や腹部をたたいたり、指や身近にいる者の身体をかんだりすることがある。</p> <p>運動・動作面については、段差のある場所において、視覚的に確認せずに歩行したり、スプーンを持って食べることもできるものの眼前の食物をわしづかみにして口に入れたり、ボタンをつまむことなく上着の前みごろを引っ張ったりなど日常生活動作が確立していない。</p> <p>コミュニケーションについては、家庭では「オハン（ごはん）」「オンモ（外へ）」などの発声要求があるとのことであるが、学校では伝達性の発声はほとんどなく、「オバ（ンバ）」「ハッ」「ンマ」などの喃（なん）語が多い。また、顔に息を吹き掛けられたり、耳元でささやいてもらったりすることを喜び、教師の顔を自分の方へ引き寄せたり、車に乗りたいときやドアを開けて欲しいときに手を引いたりするなどの行動がある。しかし、クレヨンやペンを持たせ、絵を描かせようと教師が働き掛けたり、本児の行動を規制したりすると、激しく泣き、指や服をかむなど興奮状態になりやすい。</p> <p>以上のように、日常生活リズム、情緒、行動面、運動・動作面、コミュニケーションなどに多くの課題を持つ本児は、全般的に見て発達段階は、感覚運動段階にあると思われる。</p>							
	《遠城寺式乳幼児分析的発達検査》							
	移動運動	2:3	対人関係	0:8				
	手の運動	0:11	発語	0:8				
	基本的習慣	1:4	言語理解	0:9				

指導方針	<p>手触りの良い毛布類を抱え込んだりする反面、痛さに対して低反応を示したり、また揺れや回転への抵抗感を示したりなどの課題が多く、感覚運動段階の状態像を示すことから、触覚、前庭覚などを中心とした活動を徐々に統合化していくことで発達を促すことができるのではないかと考える。また、快刺激を求める本児の欲求行動を充足させる場と時間を設定することに努め、感覚的な働き掛けを豊かにしていくことで、情緒の安定を促すことができるのではないかと考える。その際、本児の学校生活全般にわたって配慮していくことが望まれる。</p> <p>一方、本児は行動を規制されたとき、興奮して自傷行為及び他傷行為を起こすことがあるものの、名前を呼ばれて注意すると出した手を引っ込めたり、離席しようとしてもすぐに座り直したりするなど、わずかではあるが欲求を制御することがある。このような、自己コントロールの能力を確かなものにし、身に付けさせていくことも、行動や情緒面の安定につながるのではないかと考える。</p> <p>さらに、本児の欲求を充足させながら、1対1の指導の中で指導者のかかわり方を徐々に増やしていき、共感関係を深めていくことが、コミュニケーション手段の形成と拡大につながっていくのではないかと考える。</p>
指導目標	<ul style="list-style-type: none"> ○ 感覚運動面の向上 ○ 情緒面・行動面の安定 ○ コミュニケーション手段の形成と拡大
指導内容	<ul style="list-style-type: none"> ○ 感覚運動（感覚統合段階）の活動を十分に経験させる。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 触覚や前庭覚、聴覚刺激を十分に経験できる教材・教具での活動 （毛布、はけでの触覚刺激） （トランポリン、ローリングシーソー、ボールプールでの前庭覚刺激） （たいこ、ベルでの聴覚刺激） ○ 本児の欲求行動を充足させる場と時間の設定を図る。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 本児の好きな野原の散歩 ・ 遊戯治療室での自由遊び ・ わらべ歌遊びを通した全身に働き掛ける活動 ○ コミュニケーション手段の形成と拡大を図る活動を取り入れる。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 本児の興味・関心の高い物を媒介としたやり取り活動（ちょうだいの合図など） ・ 言語と併せて身体への接触行動

氏名：○ ○ ○ ○	学部：高等部	学年：1年	年齢：16歳												
IQ (MA) : 15 (2 : 2)		SQ (S : A) : 18 (2 : 2)													
状 態 像 と 課 題	<p>興味・関心のあるものであれば固執するほど手にしたり、要求したりするが、全体的に対象としての物や人の範囲が狭く外界への積極的なかわりがみられない。</p> <p>一般的に見て発達段階では、感覚運動レベルにあると思われる。触覚に抵抗がみられるものもあるし（身体接触は程度によるが（－））逆に好むものもあり、入力範囲が狭いのではないかと考える。揺れの刺激（前庭感覚）は、だっこして軽く揺らす程度はよいが、大きな揺れや身体が地上面から離脱するような不安定な状態には不安感を示す。</p> <p>コミュニケーションでは、要求するところに自分から行く、手を引いて行く、嫌なことは避ける、手の甲などをかんで抵抗を示す、不快や不安などには泣きわめく、快のときには笑うなどの行動や反応がみられる。自信号レベルでとどまっている。表情も余りなくじっとしているイメージが強い。呼名への反応やジェスチャーを交えた簡単な指示（おいでとか座ってなど）などには従える。</p> <p>認知面では、色による弁別は、2～3色の弁別だと取り組みができた。しかし、4色以上だと情報が多すぎるのか間違えることが多い。形による弁別では、はめ板などは丸だと直接対応させようとするが、四角や三角は、試行錯誤して当てはめていく。はめ板ではない仲間分けであると間違いが多い。活動に対して集中できずにいる状態が多い。自分のもの（限られたもの）や名前などが分かるなどある程度の力は持っていると考えられる。</p>														
	<p>《遠城寺式乳幼児分析的発達検査》</p> <table border="1"> <tr> <td>移動運動</td> <td>2 : 3</td> <td>対人関係</td> <td>0 : 9</td> </tr> <tr> <td>手の運動</td> <td>2 : 6</td> <td>発語</td> <td>0 : 8</td> </tr> <tr> <td>基本的習慣</td> <td>2 : 9</td> <td>言語理解</td> <td>1 : 4</td> </tr> </table>			移動運動	2 : 3	対人関係	0 : 9	手の運動	2 : 6	発語	0 : 8	基本的習慣	2 : 9	言語理解	1 : 4
	移動運動	2 : 3	対人関係	0 : 9											
	手の運動	2 : 6	発語	0 : 8											
基本的習慣	2 : 9	言語理解	1 : 4												
<p><ボディダイナミクスによる診断></p> <ul style="list-style-type: none"> これまでの指導で仰臥位の状態に対しての抵抗はなくなってきている。特に本児は、首と肩の分離が不十分であるとともに必要以上に緊張が見られる。そのために「いかり肩」のように上のほうに上がっていることが多い。腕上げ動作では、60度付近にかなりの慢性緊張がみられる。長座位の姿勢を取らせると足が屈曲し、伸展はできない。あぐら座位の姿勢をとると腰が落ち込み前かがみの姿勢になり背を伸ばすように促してもなかなか伸ばせないことが多い。 															

指導方針	<p>触覚を中心として、外界からの刺激に対しての抵抗がみられ、感覚の領域において低反応や過反応などのアンバランスがあり、基礎的な感覚の統合化が促進されていない段階（触感覚や前庭感覚を中心としたⅠ段階）と考え、触れる、揺らすなどの感覚情報を与えながら発達を促す必要があるのではないかと考える。また、本児のコミュニケーションの手段として、表出言語は少なく、手を引くなどの行動がみられるが、交信手段が分化・拡大されにくいので共感関係を深めるとともに交信の手段を探り、広げることで発達を促せるのではないかと考える。さらに、腕と肩の周囲を中心に挙上動作などの際、かなりの緊張がみられるが、腕上げ動作コントロール法を用いて弛緩させ体の動き方を学習させることで、改善されるのではないかと考える。</p>
指導目標	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自発的行動の拡大と促進 ○ 感覚面の発達の促進と概念形成 ○ コミュニケーション手段の形成と拡大
指導内容	<ul style="list-style-type: none"> ○ 昨年度と同様、基本的に本児との良好な共感関係を培っていくとともに、興味・関心の高いものや遊びを中心として自発的な行動を促していく。 <ul style="list-style-type: none"> ・ ボールプール遊び ・ おんぶしてあるくなど ○ コミュニケーションの手段として、理解言語がかなりあることも予想されるので、指示理解のできる行動を把握し、不完全なものに対しては繰り返し取り組ませることで、より確実にさせていく。また、発信行動として、身振り言語としてのレパートリーを一〜二つ獲得させるように取り組ませる。要求の対象としてのものや場所等を写真カードで選択できるようにする。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 「おいで」「立って」「座って」「だめ」（既習されている事項の継続） ・ 「始める」（手を合わせて開く）「終わり」（手を2回叩く） ○ 本児の手指の活動は、尖指対向の段階まできているがまだ十分でないことから、つまむ動作でしかも何かに入れる、差すといった目的的活動を組み合わせて取り組ませ集中力の持続化を図る。 <ul style="list-style-type: none"> ・ ゲーム遊び、ひも通し、ペグさし ・ カード分類（色と形） ○ 腕上げ動作コントロール法においては、本児とのラポート関係が十分になされる時間を考慮して行い本児が拒否的な行動をとらないように徐々に受け入れさせるようにしていく。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 腕上げ動作コントロール ・ 首肩分離（首と肩の間の緊張の弛緩） ○ 感覚的な入力刺激としてはやや抵抗のある人との肌の触れ合いを中心とし、わらべうた遊びなどを通して取り組ませる。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 「トウキョウトニホンバシ」「ウマハトシトシ」

<表2>抽出による養護・訓練の指導 指導計画例（構音障害）

担当者 ○ ○ ○ ○

氏名：○ ○ ○ ○		学 部：高 等 部	学 年：1 年	年 齢：16 歳
I Q (MA)：28 (3：9)			S Q (S：A)：33 (4：10)	
状 態 像 と 課 題	<p>日常生活におけるコミュニケーションの状態を概観すると、日常会話でよく使うものについては「りんご食べる」といった簡単な二語文により表出されており、その他の意思や要求も一語文ながら言語で行われている。従ってコミュニケーション手段は、単語を組み合わせて伝達するという言語本来の機能は十分に使いこなされていないものの言語レベルに達しているといえる。また、コミュニケーションしようとする意欲もあり、表現力は乏しいものの一語文や二語文の言語で積極的に自らの意思や要求を伝えようとする姿勢がみられる。しかし、表出する言語は構音に置換や省略がみられ、かつ早口で口の中でもりがちのために受け手に伝わりにくく、受け手がその場の状況から判断して本児の意思を読み取るか、もしくは意味不明のまま聞き流されてしまうといった状態であり、十分にコミュニケーション手段としての役割を果たしているとはいえない。</p> <p>本児の構音の状況を見ると、最も誤りが顕著であるのが上歯と舌先で構音される歯音のうちの摩擦音であり、/s/音が/t/音に、/z/音が/d/音にといずれも上歯茎と舌先で構音される歯茎音のうちの破裂音への置換がみられる。また歯音の摩擦音である/ts/音や/dz/音が、歯茎音、破裂音の/t/音や/d/音へと置換しており、同様に軟口蓋音で破裂音である/k/音のうちの/ku/音や声門音の摩擦音の/hi/音が/t/音へ置換している。さらに歯茎音の弾音である/re/音や/ha/音では子音の省略がみられる。逆に破裂音や通鼻音にはほとんど誤りがみられず、特に両唇音や歯茎音については正常な構音ができている。聴覚の弁別状態は単音では誤りはみられないものの、単語になると構音に誤りがあった/s/音と/t/音、/z/音と/d/音の弁別が困難であり、さらに/f/音や/ku/音に誤りがみられ聴覚的にも間違えて認識している様子が伺われる。</p> <p>発声発語器官については、舌の動きと下あごの動きが十分ではなく、歯と歯茎の間の微妙な舌の位置の変化や口腔内で舌を丸めたり、勢いよく伸ばしたりといった動きができなかったり細かな下あごの動きが困難であったりする。このことは食事場面にも表れており、かむことやえん下するといった摂食機能が未熟であり、食べ物を舌で奥歯の方へ送れないため手を使って押し入れたり、こぼしたりすることが多い。さらに肺の機能にも問題があり、呼吸の調節が十分にできないために歯と舌の間から微妙に息を出すことができなかったり、全体的に早口になったりなどの問題が生じている。</p>			
	◆ ITPA 言語学習能力診断検査			
	・ことばの理解 4：4 ・絵の理解 5：3 ・形の記憶 3：5 ・ことばの類推 3：3 ・数の記憶 3：0 ・絵の類推 5：10 ・ことばの表現 3：7 ・絵さがし 6：7 ・文の構成 4：9 ・動作の表現 3：7 ・全検査PLA 4：4			

指導方針	<p>本児は認知的にも言語レベルに達しており、言語をコミュニケーション手段として用いながら構音に障害があるために受け手に伝わらず、コミュニケーション手段として活用できていない。したがって構音を明りょう化することで受け手に本児の意図が伝わりやすくなるとともに本児のコミュニケーション意欲も高まり、それがコミュニケーション水準の高次化をはじめ全人格的な発達につながるのではないかと考える。</p> <p>本児の構音障害の主要因の一つとして発声発語器官の未成熟が考えられる。そこでまず、舌の動きや下あごの動き、また呼気の調節など口腔領域の筋機能や協調運動機能を高めていくような指導を十分に行うことが必要ではないかと考える。</p> <p>聞き分けについては単語レベルで誤った認識がみられるが、これは集中力の欠如によるところが大きいと思われるので、話を集中して聞く態度を身に付けさせていくことで正しい音の認識につながるのではないかと考える。</p> <p>発音指導については本児の表出している誤り構音のなかで最も正常に近い音から指導を行うことで、成就感を味わわせ意欲をもって練習できるのではないかと考える。</p>
指導目標	<p>○ コミュニケーション水準の高次化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 発声発語器官の筋機能及び協調運動の高次化 ・ 聞き分けにおける誤り構音の分離、弁別 ・ 誤り構音の明りょう化
指導内容	<ul style="list-style-type: none"> ○ 動機づけ… ラポートづくりを中心に本児が意欲的に課題に取り組むことができるように配慮する。(ex.) わらべ歌遊び ○ 基本指導… 構音の際の基本となる発声発語器官の筋機能や協調運動機能を高める指導を行う。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 口周辺の筋機能を高める指導 (ex.) 口周辺への指やアイススティック、筆によるマッサージなど ・ 舌の運動機能を高める指導 (ex.) 舌圧子による舌への刺激や唇についたウエファーを舌で取る活動など ・ 呼気の調節機能を高める指導 (ex.) 紙風船をふくらます、シャボン玉を吹く活動など ○ 聞き分け指導… 本児が興味を示す話の中に本児の誤って認識している音を多く入れるなど集中して聞く態度を養いながら聞き分けの指導を行う。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 話を集中して聞く態度を養う指導 (ex.) 紙芝居など ・ /f/音、/ku/音、/s/音の無意味音節レベル、単語レベルでの弁別 ○ 発音指導… 基本指導と組み合わせて構音法を指導する。その際、最も正常に近い誤り構音から指導を行う。 <ul style="list-style-type: none"> ・ /f/音、/ha/音、/re/音の単音及び無意味音節、単語での構音 ○ 習熟指導… 構音指導で構音した音について短文や会話の中で指導する。